



例年ですと、8月の終わりごろには「もうすぐ夏休みも終わり、いよいよ2学期が始まりますね」といった言葉が交わされますが、今年は新型コロナによる休校に伴って、夏休みも短くなり、すでに学校生活も始まりました。夏休み中も外出などを控え、思い出に残る経験が何一つなかったという人も多いのではないのでしょうか。まだまだいろんな不安や心配がありますが、みなさん一人ひとり、心も体も健康に過ごしてほしいと祈っています。

9月以降の教会学校

教会学校礼拝・こどもれいはいは引き続き行いますが、分級は当面の間お休みします。サマーキャンプに代わる行事、その他の行事も新型コロナ情勢の様子を見て、実施の有無を検討します。礼拝出席の際にはマスク着用・手指の消毒など、感染予防にご協力をお願いします。

今月の礼拝 単元6: 神が造られた世界

月日	週 題	聖書箇所	教会学校礼拝 (小5~中学生) 9:00 ~ 9:30	分級 I (小1~小4) 分級 II (小5~中学生) 9:35 ~ 9:55	こどもれいはい (幼児~小4) 10:00 ~ 10:20
9月6日	カインとアベル	創世記 4:1-16	武岡路実	分級は 当面の間、 お休みします。	武岡 基
9月13日	ノアと箱舟	創世記 6章-7章	安達正樹牧師		安達正樹牧師
9月20日	契約の虹	創世記 8:1-9:17	林 小夜子		安達いづみ
9月27日	バベルの塔	創世記 11:1-9	武岡 基		武岡路実

振起日 あまり馴染みがないかもしれませんが「振起」とは「奮い立つこと。奮い起こすこと。」という意味です。教会的には「再びしっかりと信仰を持つ」「神さまに立ち返る」とでも言いましょうか。教会学校のみなさんにはちょっと難しいかもしれませんが、「神さまのことを思い起こす」「神さまの御声に耳を傾ける」と言い換えましょう。教会の伝統の中で9月の第1日曜日を「振起日」「決心日」と定めているところもあります。これから秋、そしてクリスマスへと向かっていきます。教会の歩みもしっかり続けていきましょう。



今月の聖句

わたしは雲の中にわたしの虹を置く。
これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。 (創世記 9:13)

今月のさんびか♪

こどもさんびか 4 (つくりぬしをさんびします) (讃美歌21…6)

8月から11月まで、教会学校の礼拝では旧約聖書の『創世記』から「神が造られた世界」について学んでいきます。

みなさんは何か作ったことがありますか？例えば、工作や絵、あるいは料理やお菓子など、何かは作った経験があるのではないのでしょうか。一生懸命に作って自分にとって満足のいくものができあがると、自分にとって誇らしい気持ちになり、愛着さえ生まれます。他の人から「上手にできたね」「すてき」とか、「おいしい」と言われると嬉しい気持ちになります。逆に、他の人から「下手くそ」「変なの」とか、「まずい」と言われると悲しい気持ちになりますし、壊されたり捨てられたりすれば、怒りの気持ちさえ湧き出てきます。私たち一人ひとりも神さまに造られた存在です。他の人が何と言おうと、神さまは私たち一人ひとりを大事に思ってくださいます。他の人のことを悪く言うと、神さまも悲しい気持ちになります。自分も他人も、誰であって傷つけてしまうことを神さまはお許しになりません。

今月のさんびかは「つくりぬしをさんびします」です。そのルーツをたどっていくと、16世紀末のオランダまでさかのぼります。この時代のオランダは、近隣のスペインやポルトガルなどと絶えず勢力争いをしていました。オランダの独立戦争(1568-1648)によってスペインの支配から解放されたときにオランダの人々が歌ったといわれる作者不詳の歌です。1626年、この独立戦争をもとにアドリアン・ヴァレリウスという人が著した歴史物語の中に、戦争中に愛唱された歌を70編ほど収めました。この本はやがて忘れられましたが、200年ほどたってから、ウィーンの音楽家エドワルト・クレムザー(Kremser)さん(1838-1914)が、この中から6編を選んで『6編のオランダの古い民謡』という題で歌集を出版しました。それらの歌は彼自身が指揮を務めていた男声合唱団によって歌われ有名になりました。忘れ去られていたこの曲を発掘した彼の名を取って、この曲名はKREMSETERと呼ばれるようになりました。

当初、ドイツ語訳の歌詞によって歌われていましたが、20世紀初頭、アメリカの音楽家セオドア・ベイカーさん(1881-1934)が、収穫感謝祭の歌として“We gather together”「私たちはここに集まって」という英語訳の歌詞を発表しました。アメリカでは「収穫感謝祭にはこの歌なしには考えられない」と言われるほど、今でも広く歌われています。しかし、この歌詞はあまりに愛国的で自国中心すぎると感じていた、ニューヨークのブリック長老教会オルガニストのアーチャー・ギブソンさんは、どんな宗派の人でも、どんな国の人でも一緒に歌える収穫感謝の歌がほしいと思い、同じ教会の学生だったジュリア・B・キャディー(後に結婚し、ジュリア・B・コリー)さん(1882-1934)に、この旋律に新しい歌詞を創作してくれるように依頼しました。こうして生まれたのが「つくりぬしを賛美します」という賛美歌です。この歌詞も広く受け入れられて、収穫感謝の歌というだけでなく、今では礼拝の歌として、また感謝の歌として全世界の教会で歌われています。日本では1931年出版の『讃美歌』に「ほめたたえよ、つくりぬしを」として収録されて以来、爽やかな朝の礼拝の賛美歌として親しまれてきました。『讃美歌21』では口語訳化されるとともに、すべての節が「さんびします」と「かんしゃして」という言葉に挟まれて、神さまに感謝をささげる構成に整えられました。



たんじょうびおめでとう🎂

9月生まれのお友だち